

# 池間民族意識に関する一考察

岡本雅享（福岡県立大学）

## 1. 映画「さよならニッポン！」と池間島

筆者は2001年から政治学の講義で、沖縄県内の人口約800人の小さな島—赤尾根古島（村）が、日本からの独立を宣言するフィクション映画「さよならニッポン！」（堤幸彦監督、1995年）を見せてきた。リゾート開発による島の（自然・生態系）破壊、特にウタキ（島民でさえ入ってはいけない聖地）の破壊が、島民の怒りをかい、独立へと向かわせる。市町村合併（＝自治体の大規模化）が推進された2000年代の日本にあって、「人口二桁の自治体（米国）」「人口10万人以下の独立国家（16カ国）」等を紹介しながら、「自治とは何か」「国家とは何か」を考える一連の講義の構成要素であった。

映画では冒頭、以下の字幕が流れる。「赤尾根古島—琉球列島の外れ、中央政府からも、その存在が忘れられがちな、小さな島である。そこに住む赤尾根古人は、古くから誇り高く独立心の強い民族であり、豊かな自然、美しい海、生命あふれる珊瑚礁が、彼らの財産である。しかし、時代の中で、彼らが崇拜し愛する自然も、開発という魔手に侵されつつあった。そして古来、さまざまな「外国」によって支配され、抑さえつけられてきた彼らの長い歴史は、民族として、屈辱にまみれた歴史でもあった」。

映画の中で、赤尾根古島民は民族自決権を主張する。冒頭の字幕は、それが異民族の統治する国家領域からの独立にあたるという伏線だろう。赤尾根古島の日本国からの分離独立を主張した島民集会で、緒方拳演じる大瀬利厚年村長（のち大統領）は「我々赤尾根古島民は、古来から誇り高い民族だった。しかし歴史を振り返ると、琉球王朝に、薩摩藩に、日本国に、アメリカにと、いたぶられ……まさしく、屈辱の歴史だった」とし、「そもそも我々赤尾根古島人は、誰にも頼らず、一人歩きできる強い民族だ。我々が誇りをとり戻し、立ち上がるのは今だ」と叫ぶ。堤作品らしい「照れ隠し」のコメディ

に覆われながら、この映画の根底には「政治とは何か」「命がけでも守りたい国とは何か」というシビアな問題意識が流れている。

赤尾根古島はフィクションだが、映画で赤尾根古島とされた実在の島は、沖縄諸島・宮古島の北西約1.7kmの距離に位置する池間島である。「人口700～800人」「練馬区石神井より狭い」という島の設定は、（当時）人口約800人、面積2.83km<sup>2</sup>という池間島の実態をほぼ踏襲している。映画では、海原を渡る長大な橋の中央に国境が引かれたが、それが1992年に完成した宮古島と池間島を結ぶ全長1.8kmの池間大橋である。

例年講義で見せるこの池間島に、一度行って見ておきたいという思いが叶った2006年春、現地を訪れた筆者は、そこで「池間民族」という言葉が一般社会で使われていることを知って驚いた。池間島へ渡ると、島の入口の売店で『池間民族屋号集』という本が展示されていた（図1）。しかも「完売で島にもうない」と言われたその本が、伊良部島へ渡った時、港の売店で売られていたので、さらに驚いた。伊良部島を訪れたのは、御嶽と神社の関係を調査するのが目的で、当時は池間島と伊良部島の関係も知らな

図1 『池間民族屋号集』表紙



かったから、なぜ池間民族に関する本が伊良部島の玄関口で売られているのか、(池間民族というからには、池間島に限られると思った筆者には)意外だったのである。伊良部島の自身池間民族だという「あだん屋」の店主は、自身で調べた移住の経緯を見せて下さり、また伊良部町発行の「伊良部島観光ガイド」が「行事・祭り」欄で「池間民族特有のマークツツは、佐良浜で行われる」と書いてあるのを見たりして、筆者は池間民族が池間島を越える広がりを持ち、またごく自然に使われていることを知り、その民族意識に興味を抱いた。

翌2007年、映画「さよならニッポン！」の現地コーディネーターを務めた奥平聡氏に宮古島の平良でお会いした際、堤監督は当初ロケ地として、(橋で宮古島と繋がった池間島ではなく)離島である伊良部島を想定していたが、宮古諸島を訪れて池間民族の存在を知り、その民族意識に惹かれ、ロケ地の中心を池間島に切り替えたのだと伺った。池間島は絵(映像)を撮るための単なるロケ地ではなかった。「誇り高き池間民族」という実在の言説と重なる「誇り高き赤尾根古民族」という映画のセリフ、また1990年前後、池間島のリゾート開発をめぐる問題が発生したこと(安里英子『揺れる聖域』沖縄タイムス社、1991年、145～163頁)など、実在の池間島や池間民族が、映画には断片的に反映されていたのである。

話は前後するが、筆者は2007年の調査に先立ち、『池間民族屋号集』の編著者であり、池間郷土学研究所を主宰する伊良波盛男氏に連絡をとった。それに対し、伊良波氏は池間島、伊良部島佐良浜、宮古島の西原、平良、沖縄本島(那覇)、ヤマト(東京)で面談すべき人々のリストと連絡先を記した「池間民族意識調査」と題する書簡を下さり、2007年2月、ちょうど池間大橋開通15周年記念行事が行われた日に池間島入りした筆者を連れて、池間自治会長の所等へ案内下さった。

誤解のないよう予め断っておくが、実在の池間民族は、映画の赤尾根古民族と違って、国家からの独立を志向したりはしていない。アイヌ民族や在日コリアンが民族を語る時のような「覚悟」や、出雲人である筆者が出雲民族を語る時の「躊躇」も感じられない。したがって池

間民族を、映画の赤尾根古民族と結びつけるのは適切ではない。池間民族研究の第一人者である笠原政治(横浜国立大学名誉教授)は、著書『〈池間民族〉考』(風響社、2008年)で「池間民族に政治性はない」と断言する。だが同時に、すでに宮古では「池間民族」という名称がかなり多くの人々に認知されているとも結論している(2、175頁)。

長年、世界各国や国連における民族承認問題をみてきた筆者は現在、民族を民族足らしめるものは、つまるところ民族意識と、それを裏付ける(若干の)根拠だと考えている。池間民族の場合は、明確な民族意識と歴史、信仰、文化上の根拠がある。以下、伊良波盛男氏が紹介下さった方々との面談や著作等を通じて、筆者が知り得た池間民族に関する言説等を紹介しながら、それを立証していきたいと思う。

## 2. 池間島を元島とする移民の末裔

『池間民族屋号集』によれば、池間民族とは、池間島とそこから移住・分村した佐良浜・西原の人々、即ち池間島系統の人々の総称である。元島・池間島からの分村は、首里王府宮古頭の命により、1720年、伊良部島に佐良浜(新浜)村が創建され、本村(元島)池間島から14戸が強制移住させられたことに始まる。その後、1723年には宮古島に長間村が創建され、本村(元島)から20人が移住。1737年には伊良部島に国仲村が創建され、本村(元島)から35戸が移住。1874年には宮古島ユクダキ(横竹)に西原(西辺)村が創建され、本村(元島)から35戸、分村佐良浜から15戸が移住している。こうして池間民族は現在、主に池間島と伊良部島の佐良浜、宮古島の西原に住んでいるとされる(地図1)。ナナムイの神への信仰やマークツツ、言葉や池間系という自己認識など、これら村落には緊密な関係がある(笠原、1996年、510頁)。

2010年末現在、池間島の人口は711人、伊良部島の佐良浜は3179人(前里添1992人+池間添1187人)、宮古島の西原は900人である。沖縄本島などへの移住者や、池間とは無縁の地から、近年池間、佐良浜、西原へ移住した人々の存在を勧奨しても、池間島とそこからの移住者集団

(=池間民族)は5000人を下らないだろう。

池間島からの移住者集団は、移住先で自分達とは違う別のシマ人と見なされたようである。與那覇潤氏は、1913年の著と推定される『宮古郡・八重山郡漁業調査書』が、「佐良浜ハ素池間島ヨリ移住シ且業態ノ相違スル等一般本〔伊良部〕村ト異ル習慣アリ」と記していることを挙げ、大正初期の池間島（出身者）には、門中などに象徴される所謂沖繩的な祖先崇拜や家族制度が不在であり、そのことが「特殊性」として行政官や周囲の人々に把握されるようになっていたとする（與那覇潤、28～29頁）。池間島では実際、第二次大戦後まで位牌祭祀や年忌供養も多く、家庭では行われず、死者は逝去数日後のカヌトツバカーイ儀礼、3ヶ月後のカンナイユーイの儀礼によって直ちにカミとなる等、複雑な儀礼慣行で知られる沖繩島などの祖先祭祀とも異質な伝統が、近年まで続いていたという（笠原、2006年、155頁）。

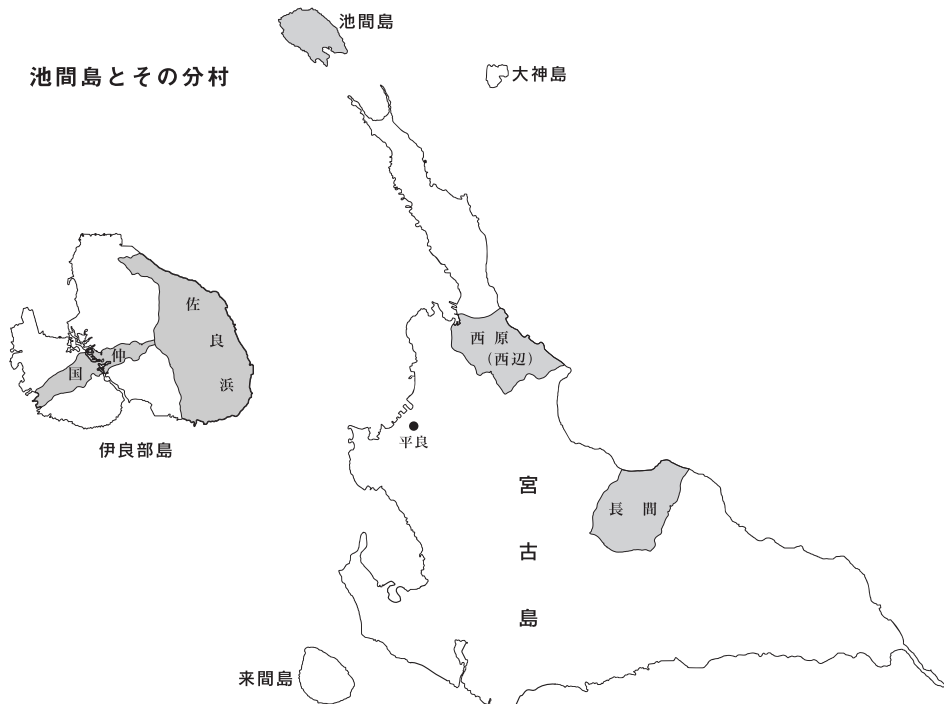
沖繩県宮古教育部会『宮古島郷土誌』（1937年）は、第一編「宮古人は何民族か」の最後で「池間人」に言及し、こう記している。「池間人の事であるが、（佐良浜、西辺人も同一民族）その人相、容貌が魁偉で言語も或特異性を持ち位

牌を持たない一風異った民族である。……彼等は南洋系統に属し、漂流して池間島に部落を造ったのではないかと思はれる。西辺人佐良浜人は池間人の移住したもので、全く同族である。池間御嶽は池間人は勿論、佐良浜、西辺等の同族間に尊崇されてゐるが、ここに祀られて居る神は池間の後、高原山に顕れたといひ伝えられてゐる」（23～24頁）。

池間人は、容貌、言語、信仰上、宮古人とは異なる民族ととらえられている。すると、池間人を他の宮古諸島人と区別する認識は、元島から移住した池間人の子孫が暮らす佐良浜や西原で、周囲の目によって創られ、池間島を故郷とする移住者の間で自覚されていったものではないかと思われる。いっぽう伊良波盛男氏は、1956年、選挙で池間島出身の我那覇吉典氏が西原出身の候補者の支援演説を行った際、民族運動の一環として「池間民族」を提唱し、それ以降、池間島、伊良部島の佐良浜、宮古島の西原の三地域で唱えられるようになったという。これは池間人自身による同胞への呼びかけであるから、少なくともこの時点で、池間民族は他称でなく自称に変わっていたといえよう。

出雲民族の場合も、明治29（1896）年、歴史

地図1 池間島とその分村





家・笹川臨風によって誕生した出雲民族という概念は当初、他者による命名であり、他称であったが、1921年に月刊誌『出雲民族』が刊行され、岡垣義人が同年「出雲民族の為に」(『神日本』第3号)を執筆する頃には、出雲人自身の自称に変わっていた(図2)。民族という枠組みが、他者によって与えられた自画像を出発点として形作られるのは、よくあることである。

池間民族の場合、池間島を元島(ルーツ)とする移住者の子孫という移住集団の記憶が、池間民族の歴史的な根拠になっている。移住の経緯もルーツも明らかである。ルーツである池間島が比較的近くに存在すること、そこから海原をこえて移住し、海を渡って故地を往来する暮らしが、海洋民族というアイデンティティを生み出したのではないかと思う。

### 3. 池間民族をめぐる言説

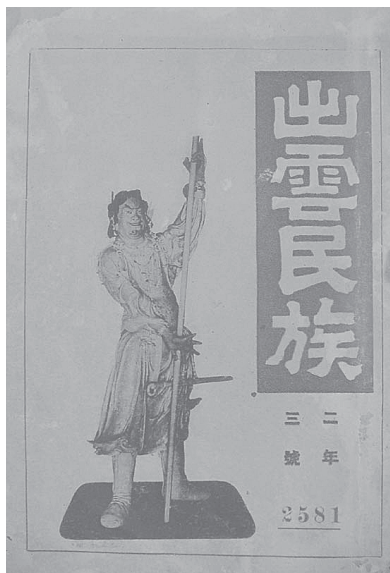
池間民族という用語は、少なくとも宮古諸島では、一般的、日常的に使われている。伊良部町役場商工観光課発行の『伊良部観光ガイド』(2007年版)は、「行事・祭り」の項目で「マークツツ……池間民族特有のマークツツは、佐良浜で行われる。旧8・9月のきのえ午の日か

ら4日間ジャー(座)に集まり、輪を作ってカンシーウィキヤヌミヤークと踊る」と記している。

新聞報道でも、池間民族という民族名は、すでに長年にわたって使われており、社会的認知を得ているといえよう。例えば、「第10回池間民族のつどい」を報じた『宮古新聞』の記事「未来へ向けて民族結束を一池間民族のつどい」(1995年12月5日)は、「このつどいは、池間民族のつながりを末永く深め、大主神社(ナナムイ)の祈りから学んだ誇り高き池間海洋民族の精神を未来永劫に継承、発展させるために行われている」と記し、「年に1回の池間民族の会合—これを通して未来へ向けて民族の結束を高めよう」という池間自治会長の祝賀会挨拶を紹介している。

また「第18回池間民族の集い」を報じた『宮古毎日新聞』の記事「兄弟の絆がちり—第18回池間民族の集い」(2003年12月7日)は、本文で「池間民族は池間島を元島とし、1720年に佐良浜、1873年ごろ西原に移住した。三集落はマークツツやユークイなどの伝統行事も共有。文化を同じくする先祖たちは、昔から親しく付き合ってきた。……池間民族はバイタリティにあふれ、底抜けに明るい気質が特徴」と記し、また囲み記事でこう述べている。「先祖のルー

図2 出雲民族という言説



月刊誌『出雲民族』1921年創刊



岡垣義人「出雲民族の為に」『神日本』第3号(1921年)

ツを同じくする平良市池間、伊良部町佐良浜、平良市西原の3地域。先祖は海洋に生き、カツオ漁業を宮古の一大産業に育てた誇り高き民族だ。自らを「池間民族」と呼び、信仰も同じくする。民族の絆を確かめ合う「池間民族の集い」は今年18回目を迎え、多彩な催しに沸いた。

この「池間民族の集い」は、池間・佐良浜・西原の「池間民族の交流を促進することを目的とする」（「池間民族の集い・経緯」）もので、1986年5月に第1回が元島・池間島で開催され、第2回は佐良浜、第3回は西原と、以降輪番制で開催されている。「池間民族の集い」実施要項には「誇り高き池間民族の血を継ぐ池間・佐良浜・西原の三地区が一同に会し、兄弟の絆を確認するとともに……尚一層の親睦を深め、民族のさらなる発展に寄与する」との趣旨が記されている。2001年の第16回「池間民族の集い」では、池間民族のシンボル旗も制定された（図3）。中心の円は元島である池間島を表わし、外側の青色は海、中心の円を囲む色の異なる波形は、三地区の兄弟が互いに輪になり、先人達が築いた海洋民族としての血筋を発展継承すべく、明朗闊達（朱色）、不撓不屈（オレンジ色）、進取の志（緑）を持って、民族の誇りと絆を深めようとの思いを表わしているという（「シンボル旗の説明」『第20回池間民族の集い』2006年、10頁）。池間民族という名称は1980年代以降、広がり、定着したといわれるが、毎年開かれる「池間民族の集い」と新聞報道等が、その普及にかなり影響したと思われる。

図3 池間民族のシンボル旗

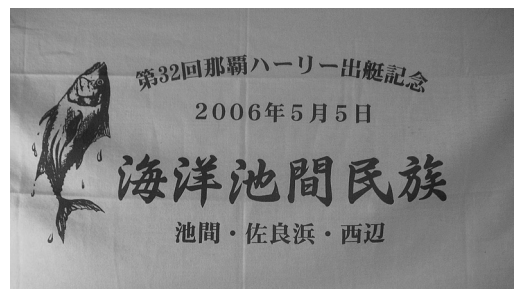


2004年8月には、池間、佐良浜、西辺出身者で構成する「海洋池間民族の会」が那覇市で発足し、「池間・佐良浜・西辺の池間民族の親睦交流を計り、絆を深めながら、社会に貢献する人材の育成を図る」（同会「趣意書」2005年4月）ことを目的としつつ、那覇ハーリーに出場したりもしている（図4）。同会の活動によって沖縄本島でも、池間民族の認知は「海洋」の二文字を冠して、広がっているといえるだろう。

こうした池間民族の集団的な表象を支えているのが、池間民族に関する諸個人の言説であろう。例えば、池間島出身の我那覇明（福岡国際大学講師）は「島の屋号を後世へ伝えたい」（『宮古毎日新聞』2005年8月31日）で、「池間島を元島とする人々は独特の風貌と言語、習俗を持ち、“池間民族”を自称している。人類学上の定義は別にして、“池間民族”という言葉は、いつの頃からか島人たちに“愛用”され、人々を結ぶ絆として定着している」と述べている。

2000年代を通じ、池間民族に関する言説を最も多く書き言葉で発信してきたのは、伊良波盛男氏であろう。その象徴的な文章「誇り高き池間民族」（『宮古毎日新聞』（2003年1月25日）で、伊良波氏は池間民族の民族性について「池間民族は、本心に忠実に生きる自己を誇らしく思う民族で……己自身を尊び、他人をも尊ぶ民族性を有している」と述べている。また『池間民俗語彙の世界』では、「誇り高き池間民族は、ミヤークツツ（ミヤークシツ）などの伝統行事や秘儀性の強いユークイ（世を乞う）などの祭祀や……同一言語……を共有し、際立って同族意識の強い人間集団である」とも説明している（2頁）。詩人である伊良波氏は、「人類万人にイキマ民族を名乗って恥じないのだ」（詩「池間（イキマ）」）とも謳いあげる。

図4 海洋池間民族の昇り旗



より若い世代では、沖縄復帰の年に生まれたという前泊美紀（現那覇市議会議員）が、OCNキャスター時代に書いた「初めまして、池間民族です」（『琉球新報』2006年7月7日）で、こう記している。「突然だが、みなさんは「どこの人か」と聞かれたら、どう答えるだろうか？…私はいつも「海洋池間民族です」と答える。私は那覇市で生まれ育った。両親が宮古・池間島出身のいわゆる宮古二世だ。池間島は、宮古島の北方1.3キロにある人口約800人の漁業が盛んな島だ。島人は自身を「誇り高き池間民族」と称す」。前泊氏は2009年に那覇市議会議員になってからも、自身のOfficial HPで「宮古・池間島出身の両親を持つ海洋池間民族」と自己紹介している。

このように池間民族の語り手は、はっきりした民族意識を表明している。では次に、こうした池間民族意識を裏付ける客観的な根拠を概観してみよう。

#### 4. 池間民族意識を根拠づけるもの

1991年以来、毎年池間島で調査を続けてきたという笠原政治教授によれば、池間民族としてのアイデンティティは、池間、佐良浜や西原の人々に共通する（1）ナナムイの神（ウハルズ御嶽）への信仰、（2）ミャークヅツ（ミャークシツ）における出生登録、（3）海洋民族という自意識等を、主な柱として構成されている。詳細は『〈池間民族〉考』（2008年）に譲るが、その概要を筆者なりにまとめると、以下のようになる。

##### （1）固有の信仰習俗

池間島にはナナムイ（ウハルズ御嶽）と呼ばれる、宮古諸島の中でも禁忌が特に厳格な聖地の一つがある。伊良波盛男氏が、池間島は古来より内外に知られたカンズマ（神島）であるというのも、そのためだろう（伊良波、2004年、15頁）。仲間登志編『宮古のお嶽と神々』（近代情報、1990年）を見ると、この池間島ウハルズの祭神ウラセリクタメナウマヌスの分身を祀る御嶽が、佐良浜（前里添）、西原（名称は池間島と同じ）と、長中、七又（名称は池間御嶽）の4箇所みられる。伊良波氏は池間島の守護神を祀るナナムイ（ウハルズ御嶽）には、池間民族の篤い信仰心がそそがれるという（伊良波、

2004年、107頁）。佐良浜では近年まで池間島とほぼ同じ神願いが年間を通して行われ、西原でもユークイなど重要な祈願では池間島の形式が受け継がれてきた（笠原、2008年、42頁）。信仰面から見れば、（太陽神アマテラスを最高神とする大和民族、地上界創造神オオナムチを最高神とする出雲民族に対し）池間島の守護神といわれるマヌスを最高神とする人々が池間民族だといえるだろう。

##### （2）ミャークヅツでのムトウ集団への登録

笠原教授が、池間民族意識の支柱の一つとするのが、ミャークヅツにおける新生児のムトウへの登録である。池間人は通常、マジヤ（真謝）、アギマス（上げ楯）、マイヌヤ（前の家）、マイザトウ（前里）という四つのムトウ集団のいずれかに属しているが、その所属が、誕生後初めて迎えるミャークヅツで決まる。そのための承認式・登録手続きが、ヤラビマスと呼ばれる乳児のためのマスマイ（ムトウ集団への加入を承認する儀礼）だという。

ミャークヅツは、夏に3日間行われる池間島最大の年中行事で、佐良浜、西原でも行われている。ミャークヅツ二日目の朝、過去1年間に生まれた新生児の親たちは、通常その子の父親が属するムトウへ赴いて、子どもの名前、（父・祖父との）続き柄、性別等を報告し、（一定年齢以上の男性で構成される）ムトウヌウヤ中心に営まれるムトウの集会で承認を受ける。池間人の女性が池間人以外の男性と結婚して生まれた子の場合は、母親が属するムトウへ届け出ることもあるという。宮古諸島外へ移住し、子どもが生まれた場合も、ほとんどの親はミャークヅツに合わせて帰郷し、ヤラビマスの儀礼を行おうとするし、当日どうしても帰れない場合は、親類縁者に依頼して代理でムトウへ届け出てもらったりもする。佐良浜と西原でも、ミャークヅツの際、同様の新生児登録と承認が行われている。

ミャークヅツでムトウへ出生を届け出て、ムトウヌウヤから認知されていることは、池間民族の一員であることの明らかな証になるということだ。

##### （3）海洋民族性

池間民族論の中で、池間民族が海洋民族だという自意識はよく見られる。例えば我那覇明氏



は、前掲の文章で「“池間民族”は勇敢な海人として知られている」「屋号から、豊見親の船を操って大海原を渡ったアギマスの先祖の勇姿が浮かび上がってくる」と述べている。また前泊美紀氏も2007年のインタビュー記事で「私自身は『海洋池間民族』の血が流れていることを誇りに思っています。海から生まれ、海に生かされてきた祖先。それは、荒波を乗り越え、大海原の恵みを授かった島の人々が持つ特有の財産」であると語っている（『復帰っ子』のきずな結ぶ』『宮古毎日新聞』5月18日）。伊良波盛男氏は前掲「誇り高き池間民族」で、池間海人は「はるか海彼の果てまでも、小舟を漕ぎ、漁船を大海に乗り入れ、未知の海洋に挑み、挑戦し続けて海事を成し遂げることによって自信と誇りを身につける」「池間民族の子々孫々は、海洋民族の血筋と精神を受け継いで愛と智恵と勇気を誇る『誇り高き池間民族』なのだ」と述べている。

笠原教授は、琉球弧一円で、海人のイキマー（池間島民）の知名度は高いという。そして、宮古諸島で漁労民は池間民族だけで、他は農耕民だという前泊徳正氏の言説を紹介しながら、池間人を「海洋民族」とするこうした認識は、明治期に導入され、大正半ば（1920年前後）に最盛期を迎えた近代カツオ漁業の成功という歴史的経験に根差しているとする（笠原、1996年、510、524頁）。

以上の3点だけでも、民族意識を裏付ける根拠としては十分であろう。この他、筆者は宮古諸島、沖縄本島で会った人々から、池間民族は運動能力が高いとか、容貌・体格が違うといった人種的特徴ともとれる話も聞いた。その真偽はともかく、池間人は宮古人とは違うという認識が、風説も交えながら、自他ともに広がっていることを伺わせる。それは、宮古諸島の中で、池間人だけは起源の違う所から大海原を渡って来たのではないかという自意識、海洋民族という認識とも連なっている。客観的な民族的特徴があっても、明確な自意識がなければ、一つの民族として成立させることはできないが、池間民族の場合は、両者が揃っているといえるだろう。

## 5. 民族とは何か？

笠原教授は、池間民族の「民族」は「研究者が慣れ親しんでいる用語と同じ意味で使われているのではない」という（笠原、2008年、22頁）が、筆者は、池間人が民族という言葉の意味を知らないで、池間民族を称しているとは思わない。池間民族という呼称でなければ伝わらないニュアンスがあるから、そう言っているのだと思う。「研究者が違和感を抱く」（笠原、同前）という懸念を払拭するためには、「民族とは何か」という根源的な問いを、池間民族に即して、改めて見直しておく必要があるだろう。

小林よしのり責任編集『日本国民としてのアイヌ—なぜ「単一民族国家」という言葉がタブーなのか』（小学館、2008年）所収の鼎談「タブーなき民族論」は、「そもそも『民族』とは何か。その定義がなされて初めて単一民族か多民族か、そして『日本民族とは』を語れるのではないか」という問題提起で鼎談を始めている。しかし、核心であるこの点については「国家を形成し得る規模の集団でなければ『民族』とは言えないような気がする」とする小林氏に対し、富岡幸一郎氏が「国家を形成できない規模の少数民族であっても、固有の強い宗教性を持っている場合、私は一つの民族と呼べる気がします」と返すなどかみ合わず、現代日本における民族概念の不統一性を露呈する結果となっている。

民族は1880年代、nationの訳語として日本で創られた漢字用語で、nationはラテン語のnatioに由来し、もともと「異教徒」や「出身、言語、文化の共有によって特徴づけられる人間のまとまり」を意味する言葉である（詳しくは拙稿「日本における民族の創造」『アジア太平洋レビュー』5号）。したがって、nationのもともとの意味に基けば、池間民族という呼称は、学術的にみても何らおかしくない。nationはその後、フランス革命を経て「国家を構成する個人全体」をも意味する言葉として使われ始め、「国民」ひいては「国家」を示す言葉ともなり、nation（民族）とstate（国家）が一致した政治的統一体=nation stateが近代国際社会の主体となる。「国家を形成し得る規模の集団」という発想は、後者に引きずられたものである。

しかしながら、その規模とはどのくらいだろう。世界を見渡すと、バチカン市国（1000人）を筆頭に、ツバル（1万1000人）、サンマリノ

(2万6000人)、モナコ(33000人)、セントクリストファー・ネイビス(3万9000人)等、人口10万人以下の独立国家が16カ国ある。全世界12か国中1カ国の割合は、少ないとはいえない。いっぽう、13億人の漢族を擁する中華人民共和国では、トールン族(7426人)やホジェン族(4640人)、ロッパ族(2965人)など、人口数千人の集団も、漢族と同様、56民族の一つとして公認している(2000年の第5回全国人口センサス)。池間民族は、現実の世界で一つの民族として認められている集団と、同数またはそれ以上の人口を有している。「国家を形成し得る規模の集団」という尺度で、池間民族を否定することはできない。

笠原教授は、「集団の出自や言語、身体形質など、……今まで学術面から池間島やその分村の人々だけに特別な違いがあると論じられたことはない」し、「学術書で、宮古諸島の北部に『少数民族』が存在すると述べられたこともない」から、池間民族の「民族」は「研究者が慣用する民族と同じ意味ではない」という(笠原、2008年、22頁)。しかし、それは私達が今、池間民族の創出(潜在的にあったものが実体化される)過程を見ているからではなかろうか。

漢字用語「民族」が誕生した時の記憶が残る20世紀初め、喜田貞吉は「日本民族概論」(1918年)の「人種と民族」で「民族は主として精神的方面に認められる区別である。……時としては異人種相寄り相混じて、同一民族を構成する場合もあれば、同一人種と認むべきものの中にも、もちろん多くの異りたる民族が発生し得る」と記している。その具体的な事象は、中華人民共和国における民族識別調査でも、少なからず見られた。例えば、大瑤山(現在広西チワン族自治区金秀ヤオ族自治県)での民族識別調査では、大瑤山に住む5集団(名称も違う)は異なる時期に別々の地域から入ってきた本源の違う人々で、言語上もヤオ語、ミャオ語、トン語に近い言語に別れ、一つの民族と見做しがたい状態だったが、共同で山の秩序を維持し、外敵の侵入に抵抗してきた社会組織をもち、当地人達が自分達は同じヤオ族だという認識を持っていたので、一つの民族共同体と承認しないわけにはいかなかったという(拙書『中国の少数民族教育と言語政策』42頁)。

言語も常に科学的に分類されているわけではない。スペイン語とポルトガル語の差は、標準日本語と宮古語の差より小さいが、それぞれ独立した言語とされている。気仙の山浦玄嗣医師は、ケセン語を日本語と対等な独立言語と位置づけ、『ケセン語大辞典』(2000年)等を出版しているが、「池間民族語の本質的なものは失われずに、(池間島、佐良浜、西原)それぞれの地域文化や精神生活を豊かなものにしていく」という伊良波氏の『池間民族語彙の世界』(3頁)も、言語的特徴を示す客観的根拠の一つとなる。

笠原教授は、池間民族には、地方政治に独自の勢力を築こうという発想などなく、少数者の権利を主張しているわけでもないから、「民族問題や民族紛争という場合の「民族」と同じ意味に考えてしまうのは、いささか早とちりにすぎるとも述べているが、それは池間民族という集団的まとまりが、勢力の拡大を意図しておらず、また抑圧を感じていないからにすぎないのではないか。もし日本のマジョリティが池間民族意識を否定しようとしたら、その時、池間民族問題が生じるだろう。民族問題は、往々にして、マジョリティ民族が(他民族の存在を否定したり、抑圧したりする時)引き起こすものである。民族は本来、個人にとって「自分は何者か」というアイデンティティの基礎をなす主要な要素であって、必ずしも政治的な意図を伴うものではないし、問題や紛争ばかりと連動する厄介なものでもない。

## 6. 宮古諸島の多様性と池間民族

前掲の鼎談「タブーなき民族論」で、宮城能彦(沖縄大学教授)は、「琉球人は大和民族の一部なのか、まったく別の民族なのか。……民族という概念をどう定義するかによって、別の民族にもなれば同じ民族にもなる」「『琉球民族』と一括りにされますが……沖縄本島と宮古と石垣では言葉が全然違う。……言葉が通じないということは、別の民族と考えてもいい」と語っている。これまで、池間民族意識が、研究者から「違和感を抱く言い方」と受け止められながらも、明確に否定されることがなかったのは、池間民族を内在させる宮古諸島自体が、沖縄本



島とも違う文化的・言語的独自性を持つ多様な社会であることと、関係していると思われる。

沖縄県宮古教育委員会『宮古島郷土誌』（1937年）は、第一編で「宮古人は何民族か」と題し、こう記している。「宮古人が……如何なる人種系統に属するか、又何所から如何なる経路を通過して来たか？ これ等の疑問は長年に渡って多数の人々を支配し、未だ解決の曙光さへ見えない。或は単なる一事実によって支那民族の一分派と断じ、或は南洋系統と信じ……全く五里霧中の状態にある。由来、我国史上に於ても、建国者たる大和民族の人種論は考古学、人種学、言語学、土俗学等種々の方面から研究されて、それに伴ひ論争が続開され、何れも未だ定説がない。況んや、本県の如き、言語、風俗の差異ある、又歴史上数百年日支間に両属の観を呈した所謂琉球人が果して何氏族であるか、混沌たる有様であるのも無理もない話である。更に、琉球人といふ地方的一集団中の沖縄本島人と宮古人とは如何なる関係があるか、同一民族か否かは確に興味ある問題であらう」（1頁）。そして様々な考察を経て、「結論」として、宮古人は単一の民族ではなく、南洋系諸民族の融合された混血種を根幹として、それに後世色々の原因によって渡来した諸種の人種が渾然同化して現今の宮古人を形成したのではないかと述べている（21頁）。

那覇潤氏はこうした言説を紹介しながら、琉球弧内部には、沖縄本島中心の「民族」観に包摂しきれない多様性があり、琉球弧の近代史を見た際、必ずしも「民族」が琉球列島全体を包含する規模でのみ把握されてきたのではないとする（2、26頁）。

那覇在住の宮古島出身者から、宮古諸島の人々が那覇へ出かける時、「沖縄へ行く」と言うのだと聞いたことがある。沖縄人に対し、宮古人を自称する。沖縄本島人が、宮古語は「外国語のようだ」というのを聞いたことがあるが、宮古語で歌う下地勇氏の歌を、沖縄語を使う沖縄本島の人々は聞き取れない。そうした沖縄県内の多様性に気付かない日本本土の人々が、宮古人をウチナーンチュと呼んだり、その言葉をウチナーグチと称したりするのは、快いものではないだろう。

宮古諸島自体が、日本はおろか琉球弧内部の

多様性を示す小宇宙であるから、その中で池間民族意識が生まれ、受容されやすい土壌があったのではないか。それはまた、その多様な宮古諸島の中で、池間民族という一つの民族意識を創り上げることができる条件を、池間人の場合、特に持っていたということにもなる。それが、分村・移住という歴史的経緯であろう。

伊良波盛男氏も、2007年2月の筆者への書簡で、池間民族の元島・池間島で「池間民族」という言葉を常用している人は僅少ではないかと思われ、どちらかといえば、異郷に在る者が寄り集まった際、懐郷の念をもって発言する傾向の方が多くと書かれている。池間民族という名称は、池間島から島外へ生活の場を移した出身者の間で、1980年代半ば以降、自分たちのアイデンティティと結びつけて使われ始めたともいわれる（笠原、2006年、162頁）。元島を離れて暮らす池間人の存在—そこに、池間民族意識醸成の鍵があると思う。

池間民族という民族意識は、池間島を元島とする人々が、別の島（伊良部島、宮古島）へ移住し、異郷のシマで暮らすことになったという歴史的記憶に根ざしている。池間民族に関する言説や団体を立ち上げる人々の多くが、伊良部島（佐良浜）、宮古島（西原）、沖縄本島、東京などに住む池間人であることから、それは伺える。例えば、2007年から2008年にかけて、グラビア誌『島たや』3、4、5号に「宮古島池間民族の神願い」「池間民族（西原）のミャークヅツ」を連載・執筆した仲本光正氏は、東京在住、西原出身である。2004年に発足した「海洋池間民族の会」は、那覇市在住の前泊甫美氏が会長を務めている。

同会の「趣意書」（2005年4月）には、「以前は旧暦1月16日になると、ハラウズマエのため、佐良浜からはサバニで、西辺からは狩俣経由で、元島池間に皆が集まってきたが、こうした光景はいつの日か薄れ、消え去った」と記されている。自分達のルーツ、元島との絆が薄れゆくのではないかという危惧や、池間島外に暮らす人々の自分探しの旅が、池間民族意識を醸成してきた側面もあろう。「池間民族の集い」発起人の一人、佐良浜代表の長浜光雄氏が下さった同集いの「経緯」（2003年）には「池間・佐良浜・西原は、池間島を元島とし、古来より

親交を深めてきたが、近年、生活様式の変化等に伴い、その交流が薄れがちになってきたので、民族としての交流・親睦・ルーツ探しの催しを開くべきとの声が高まり、第1回を元島・池間で、第2回を佐良浜、第3回を西原で開催した」旨が記されている。「民族の集い」は池間、佐良浜、西原からの4人の代表を発起人として始められたが、「民族のルーツ探し」のニーズは、元島より佐良浜や西原の方で強いものだろう。

池間島をルーツとする人々は、複数の場所に集団で移住しながら、共通の歴史・文化・信仰・言語を共有し続けている。別々の島に住みながらも、自分達はルーツを同じくする同胞であるという意識の表れ、民族という言葉でこそ伝わる同胞意識が、そこにはあるのだろう。池間民族の場合、移住先と故地（元島）が比較的近くにあつて、ルーツを確認しやすいという状況も、民族意識を育みやすい条件になったと思われる。

## 7. 多元社会・日本における民族観

大学の講義で、自分自身の民族的アイデンティティの根拠を考える課題を出すと、九州や本州北岸域出身の学生達は、出身地から何がしか根拠を見出してくるのに対し、太平洋ベルト地帯出身の学生の間では、一般に日本という全体の枠組み以外のエスニック・レベルでのアイデンティティの根拠が希薄であるという傾向が見えてきた。「日本は単一民族ではない」という主張をみても、九州では「私は熊襲です」という肥後（熊本）出身の同僚や、「自分は大和ではない」という筑紫（福岡）出身の同僚がいるなど、そもそも日本人内部が単一ではないと思っている人が多いが、首都圏・関西圏の日本人は、アイヌ民族や在日コリアンという他者の存在を挙げて、それを否定する場合が多い。日本人内部は、単一・同質だと漠然と感じているのだろう。筆者は以前、風土が民族を育むものならば、風土なき都会が民族を喪失させ、そこで単一民族観が広がるのかもしれないと書いたが、それだけでなく、民族は自分と異なる他者の存在をもって自覚されることが多いから、首都圏や都市部では在日外国人という、より異なる他者によって意識される「われわれ」は、日

本人という集合体になりやすいのかもしれない。都市部では、先祖代々その土地で暮らしてきた者ではない「よそ者」が多い。郷土へ帰れば、その地域の言葉で話す人々も、首都圏や都市部では標準語で話そうとするから、言葉の違いも見えにくい。

大学の講義では「自分がどの民族に属するかなど、考えたことも、意識したこともなかった」「私は自分が何民族であるか分からない」といったコメントを寄せてくる学生もいる。翻って、前掲・前泊美紀氏の「初めまして、池間民族です」を見ると、こう記している。「多くの宮古二世がするように、私も小学生の夏休みは両親の故郷である池間島で過ごした。……日中は、深緑の草いきれの中を、汗だくになって駆けまわった。夜は、花火や各自手作りのちょうちんをともし、マズムン（お化け）にみられないよう、注意しながら帰った。…そんな島の「12分の1」年の暮らしが、私のアイデンティティの基をなしている。ところで、あなたは「どこの人」ですか?」と。

池間島の自然、風土とその中での暮らしが、前泊氏の民族的アイデンティティの源泉になっていることがうかがえる。「アイヌ・沖縄を考えるブログ」(blog.namako.versus.jp)には、「私は自分が何民族か知りませんが、正直そんなこと考える事がおかしいと思いませんか」(MVP、2008年11月24日)といった書き込みがみられるが、そうした言動は、自分のルーツを把握し、民族意識に基くアイデンティティを堂々と示せる人への羨望の裏返しのようにも思える（そうでも言わなければ、そうできない自分を正当化できないから）。

本当は同質ではないのに、同質社会幻想の中に漬かってきた多くの日本人は、そのギャップの中で、自らのアイデンティティの源泉を見出せないで彷徨っているように思われる。21世紀は多様性の社会と言いながら、日本では多元社会観に基づく国民意識の再構築を齎す思想は、まだ熟成されていない。漠然とした虚ろさの中の一つの焦燥感が、一部の人々のアイデンティティの探求を「想像の共同体」日本人へと向かわせ、反中国・嫌韓流の流れに同調したりしているのではないか。大和民族（1888年～）も、出雲民族（1896年～）も、近代国家形成におけ

る国民意識醸成の過程で生まれたものであった。そうした中、池間民族という民族概念が、nation stateのしがらみと無縁な所で、池間人達自らの手によって創成されつつある過程は、多元社会観に基くNation Buildingの再構築にとって、先進的な役割を果たす可能性を持っているとも思う。池間民族意識は、「われわれ意識」の発露であり、「自分は何者か」というアイデンティティの源になっている点で、他の民族意識と変わりはない。民族意識が虚ろな日本人が多い中、はっきりした民族意識をもつ人々の集団といえるだろう。少なくとも、池間民族という自意識は、個人のアイデンティティ確立に、ポジティブな意味を果たしていることは間違いなく、周囲はそのアイデンティティを尊重し、肯定的に見守るべきだと考える。

#### 【主要参考文献】

- 沖縄県宮古教育部会『宮古島郷土誌』1937年。  
笠原政治「＜池間民族＞考—宮古島嶼文化の個性と文化的個性の強調」『沖縄文化研究』22号、1996年2月。  
笠原政治「生まれジマは如何に語られるか—再び＜池間民族＞をめぐって」『沖縄文化研究』40巻2号、2006年6月。  
笠原政治『＜池間民族＞考』風響社、2008年。  
伊良波盛男『池間民俗語彙の世界』ポーターインク、2004年。  
伊良波盛男編著『池間民族屋号集』池間郷土学研究所、2005年。  
與那覇潤「戦前琉球弧における『民族』概念の展開」『沖縄文化研究』32号、2006年。